

家庭科教育における児童虐待の授業

—自分の身に引き寄せて児童虐待をとらえるために—

伊深祥子*

杉本詠美**

1. はじめに

厚生労働省によると、平成 23 年度の児童相談所の児童虐待の相談対応件数は、児童虐待防止法施行前の平成 11 年度の 5.2 倍に増加している（約 6 万件）。虐待死はほとんどの年で 50 人を超える。これまで家庭生活を教科の対象とする家庭科では、「保育」領域が設定されてきたが、その内容は子どもの発達の知識や、おもちゃづくり、おやつづくりが主な内容であった。

平成元年告示の指導要領では新たな領域として「家庭生活」が男女共に学ぶ必修領域として設置された。平成 10 年告示（1998）の指導要領では「家庭生活」は「家族と家庭生活」と名称が変更され、男女共に必修領域として家族について学ぶことになった。平成 20 年告示（2008）の指導要領では A 領域として、「家族・家庭と子どもの成長」が設定された。「家族・家庭と子どもの成長」は、「わたしの成長と家族」「わたしたちと家族・家庭と地域」「幼児の生活と遊び」「幼児とのふれ合い」「これからのわたしと家族」の 4 つの項目から成り立っている。自分の成長や家族や家庭、地域のあり方を学んだり、幼児に関する知識や幼児とのふれ合い（必修化）が重視されている。しかし、子育ての負の側面である児童虐待についてはほとんど扱われていない。過去 3 年間の教科書では、子どもの権利条約や児童憲章、子どもを守る取り組みについてはしっかり取り上げられているが、虐待についてはわずかな記述があるのみである。鶴田（2004）は、中学校の教科書検定で、児童虐待についての記述は削除することが求められたので、教科書には児童虐待に関する記述はありません。しかし、情報社会にあつて、児童虐待の出来事は中学生くらいであれば知っていますとし、中学生にそれを考えさせないようにするのは、適切ではありませんと述べている。平成 23 年発行（2011）の教科書には虐待の記述がわずかにみられる。しかし、授業実践報告では、幼児の発達やふれあい体験学習は多くみられるが、虐待の授業は少ない。

2. 研究方法

4 つの虐待をとりあげた先行実践を分析し、虐待の授業づくりの視点を探る。つぎに教員養成大学の学生に模擬授業を 4 回実施し、授業後のカンファレンス、授業における学生の記述、授業後のアンケート調査、およびナラティブアプローチで授業分析をおこなう。模擬授業 4 回の実施時期は平成 25 年 6 月から平成 25 年 12 月である。

* 愛知教育大学

** 吉良高等学校

3. 虐待を取り上げた4つの授業実践の分析

3.1 現代生活を探求する授業 1999年 授業者：天野稔子：中学校

(天野稔子・山田綾、愛知教育大学教育実践総合センター紀要)

1999年に報告された天野の実践は、性別役割分業による家族をとらえ直すことを目的に取り組まれた実践である。生徒の家族像の前提となっている性別役割分業を揺さぶり、問い直すために、子ども虐待、早期教育を取り上げている。題材は、児童虐待を描いた漫画「凍りついた瞳」(ささやななえ・原作椎名篤子、1999、集英社)である。

はじめは、「ひどい母親」「考えもつかないことが起きていた」「とにかくかわいそう」といった感想をもっていた生徒が、授業後は、育児は母親の責任と考えている父親の問題、「子どもをかわいいと思うもの」という世の中の常識の中で、母親がより孤独になっていった状況を理解している。授業では、虐待は母親だけが原因ではないことは理解されている。しかし、「最初は、なんてひどい母親なんだ、と思ったけどよく読んでいくと、父親が無責任なので腹が立った」「子育ては両親が協力した方がいい」「子育ては母親がしたほうがいいと思っていただけ、保健所や児童相談所などがあってよかった。」「いろいろな人が子どものためにと考えていて、友子も最後は元気になったので良かった」という生徒の記述からは、生徒が虐待を自分とは距離のあるものとしてとらえているようである。育児不安や育児のストレス、夫や社会の育児参加について考えさせることで、性別役割分業について固定観念を崩すことはできているが、児童虐待を自分の身に引き寄せて考えることはできていない。

3.2 赤ちゃんポストを考える。2013年 授業者：石川勝江(中学校)

(『評価が変わると授業が変わる』伊深祥子・野田知子・石川勝江・菅野久実子、開隆堂)

石川の実践は、幼稚園・保育園(保育所)体験を行った後、赤ちゃんポストの新聞記事を通して児童虐待を考える実践である。生徒12名の授業後の感想には、とにかく虐待はいけないという意見だけでなく、虐待を受けた子どもへの思いをつづったもの、自らの体験を交えて虐待についての記述がみられる。石川は、「自分の生きてきた歴史は変えられない、でも未来は変えられる」と述べている。しかし、自分の生きてきた歴史は変えられないのだろうか。虐待について学ぶことで虐待という辛い歴史であっても、視点を変えることで、自分の生きてきた歴史を変えることができるのではないだろうか。この授業でも、「自分が親になったら絶対しない」「自分には何でそんなことをするのかさっぱりわかりませんでした。平気でそういうことをするのはおかしいと思いました」などの生徒の記述が見られ、虐待を自分の身に引き寄せて考えることができていない生徒が多いことが読み取れる。

3.3 児童虐待 2013年 授業者：小松理津子(高等学校)

(『生きる力をつける学習』望月一枝・倉持清美・妹尾理子・阿部睦子・金子京子、教育実務センター)

この授業では、絵本、パワーポイント、iPad、画用紙、どこでもシートなど多くの教材が使用されており、新しい授業の形であると言える。授業者である小松は、最新の情報を取り込んで見

せることにより、より生徒の関心を引き付けることができるのではないかと述べている。教材は絵本「ぼく、あいにくきたよ」である。絵本を使うことで登場人物の気持ちになりきり易かったと考えて絵本教材が使われている。授業では、虐待された子どもの立場、虐待を続けた母親の立場で答えることは苦しそうで、答えながら目を赤くしていたとある。感情移入して虐待をとらえることがこの授業の目的であるのかもしれないが、生徒が感情移入しすぎてしまうことで虐待について客観的に考えることが出来なくなることが危惧される。

3.4 虐待を考える 2013 年 授業者：片桐哲郎（高等学校）

（『あんころ（虐待を考える）』千葉県高等学校教育研究会家庭部会・家庭科教育推進委員会、教育図書）

虐待の実態や問題点について理解し、不幸な虐待が起こらない社会環境を考えることが授業の目的である。新聞記事や特集を生徒に読ませ、ワークシートに内容をまとめてからつぎの4つの点について意見を書かせる展開である。①あなたが考える児童虐待とは具体的にどういうことですか？②「しつけ」と「虐待」についてあなたの考えを書いてください。③“虐待の連鎖”についてあなたはどうか考えますか？④あなたにとっての「幸せ」をできるだけ具体的に書いてください。

この授業の課題は、4つの発問それぞれに繋がりがみられないことである。特に発問4は、「幸せ」について考えさせているが、虐待を考えることと「幸せ」について考えることのつながりがみえない。また、虐待についての情報は、新聞記事などを各自が読んだだけで虐待について考えさせているため、虐待が起きる背景に迫ることができないのではないだろうか。この授業では、「虐待は悪いものだ」ととらえて授業が終わってしまう可能性がある。

3.5 虐待の授業の方向性

分析した4つの児童虐待を取り上げた授業では、生徒が児童虐待を自分の身に引き寄せて考えづらく、親批判・社会批判になっていることが分かった。児童虐待を自分の問題としてとらえる授業が必要である。そのためには、被虐待者の立場から児童虐待を考えるだけでなく、加害者の立場から虐待を考える授業展開とし、教材は、まんがや絵本ではなく、新聞記事を使用することで、虐待の事実から虐待がなぜ起きるか、その背景に迫ることを試みる。そして、「虐待は絶対にしてはいけないことだ」ということを伝えることが大切である。虐待がいけないことであると伝えるだけでなく、これから大人になり、親になる生徒たちが、なぜ虐待が起きてしまうのか、その原因について考えを深めることで「もしかしたら自分も様々な原因によって虐待をしてしまうかもしれない」と考える授業をつくる必要があるのではないだろうか。虐待をしてしまう親を擁護するのではない。虐待は誰もが加害者になるかもしれないとして虐待を考えることが虐待の防止に繋がると考える。本研究では、「なぜ虐待をしてしまうのか」という親の目線に立った授業を試みる。4つの授業実践の分析から本研究で提案する授業の方向性を3点述べる。

- ・児童虐待をしてしまう加害者の背景に迫ること。
- ・児童虐待を自分にも起こり得る身近なものとして捉えること。

- ・社会全体での子育てや支援の必要性に気づくこと。

4.1 模擬授業③ 厳しい指摘を受けた授業

生徒に身近な児童虐待の事例として愛知で起こった虐待死の新聞記事（豊橋 4 歳児放棄事件.(2013.7.2).中日新聞社）を教材とした。模擬授業①②（省略）では、導入で親の心情に近づくために、赤ちゃんの泣き声を聞かせていたが、3 回目の模擬授業では、まとめて泣き声を聞く展開とした。

- 1) 対象者：愛知教育大学理科 2 年生
- 2) 授業日時：平成 25 年 12 月 4 日
- 3) 授業者：杉本詠美
- 4) 題材名：児童虐待を考える
- 5) 学習目標：虐待する加害者の気持ちを考えることができる。

虐待を自分の身に引き寄せて考えることができる。

社会全体での子育てや支援の必要性に気づくことができる。

- 6) 授業展開：

豊橋市で起きた虐待死の新聞記事を黙読し、「どうしてこの虐待が起こってしまったか」をグループで発表する。つぎに赤ちゃんの泣き声を大音量で聞き、感想を述べる。最後に 2000 年の愛知県の虐待の新聞記事を示すことで 13 年前から変わらず虐待が起きていることに何かできないか考える。

4.2 虐待の授業の難しさ

授業後のアンケートには、授業への厳しい意見があり、虐待の授業をする以上、授業者も覚悟をして挑まなければならないと実感した授業となった。カンファランスを繰り返す中で、授業の流れが見えなくなり、授業者が子どもに何を伝えたいのかが分からなくなっていた。やりたいことと、授業の流れが別物になっている感じがした授業になってしまった。授業をしていて、生徒役も辛い思いをしたし、授業者も辛い思いだった。虐待の授業の難しさを実感する事となった。

アンケートの中で、「虐待の授業を家庭科でやるべきではない・やったほうがいいが注意が必要である」とした記述には次のようなものがあった。

- ・虐待の事実や原因を知ることが大切だが、それで終わってしまうのは家庭科ではない。家族とのかかわりや地域社会とのかかわりに繋げていくべき。
- ・小学生に虐待の授業やって意味があるのか。結局「ひとごと」で終わりそう。
- ・クラスの児童に被虐待者がいて虐待の授業を行えないような状況のときに無理をしてまで行う必要はない。
- ・虐待をされている人にはデリケートな内容かもしれない。でも、そういう人にこそ知ってもらうべき内容だと思う。
- ・虐待する親が悪いということを分からせるぐらいならやらない方がいい。複雑な原因はある

が何がいけないのかをこども自身が考えることが重要。

- ・それぞれの家庭事情があるから、一概に偏った知識をつけるくらいならやらない方がまし。やるならきっちり構成を考えないといけない。

授業後のアンケートの結果を表1に示す。

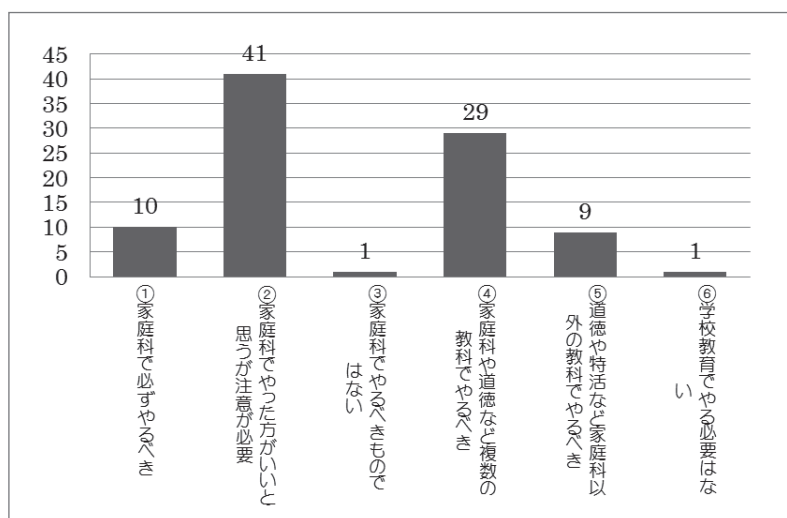


表1 家庭科で虐待の授業を実施することについて

表1では、虐待の授業を家庭科で実施するときには注意が必要であることが示されている。また、授業後のアンケートには、「道徳や特活は他のことで時間が取られがちなので家庭科でやらざるをえないと思う。」「道徳などで、『〇〇してはいけない』みたいな“正義”を植えつけられるので、その点に注意が必要。」という記述があり、虐待の授業は家庭科だけでなく、他の教科でも取り組むことが必要であることが示された。

4.3 虐待の授業をつくりなおす

児童虐待の授業は、生徒にとっても授業者にとっても辛い授業になる可能性がある。誰かを傷つけるかもしれない危険性は、学校現場で児童虐待の授業実践が行われない原因の一つである。しかし、だからこそ虐待の授業づくりを続けることが必要ではないだろうか。学校現場で児童虐待を受けている可能性のある児童・生徒が教室にいる可能性がある。虐待の授業を実施することで、少しでも児童・生徒のためになるよう、授業を改善しなくてはならない。授業づくりを続け、改善していくことでしか学生からの厳しい指摘に応えることはできない。

模擬授業③後のカンファレンスでは、授業の学習目標が主観性と客観性をもっていることが議論された。学習目標の「社会全体での子育てに気づくことができる」は客観的に新聞記事の児童虐待の事件を捉えた場合の目標である。それに対して「虐待を自分の身に引き寄せて考えることができる」「虐待する加害者の気持ちを考えることができる」は主観的な目的である。主観と客観の目標を同じ授業で達成することは可能だろうか。厳しい感想をもとに模擬授業④を実施した。

4.4 模擬授業④ 教職実践演習

- 1) 対象者：愛知教育大学家庭科 4 年生 教育実践演習受講者
- 2) 授業日時：平成 25 年 12 月 5 日
- 3) 授業者：伊深祥子

授業を生徒の立場に立って分析するために、授業者は伊深とし、杉本は生徒として授業観察を実施した。授業の大きな修正点は、新聞記事から、「事実」と「気持ち」をていねいに書き出したことである。また、「イライラする」などの親の目線の感情をもつことを目的に、赤ちゃんの泣き声を模擬授業①②と同様に導入で扱った。導入で赤ちゃんの泣き声を聞いた方が、新聞記事への移行がスムーズに行えると判断した。資料 1 に模擬授業④の指導過程を示す。資料 2 に教材とした新聞記事を示す。

	学 習 活 動	支 援 ・ 留 意 点 ・ 評 価
導 入	児童虐待について知っていること	
	児童虐待について知っていることを発表する。 泣き声を聞く	「児童虐待についてどんなことを知っていますか」 赤ちゃんの泣き声を聞いてどんなことを感じましたか
展 開	泣き声を聞いて感じたことを発表する。	「家のリビングでくつろいでいる時のことを思い出しながら聞いてください。」
	新聞記事の配布 音読	
	新聞記事の事実をまとめる	
展 開	新聞記事を読んで、人物に関する事実と気持ちを学習シートにまとめる。 発表する。	事実と気持ちに分けて板書する。 人物名は先に黒板に板書しておく。
	この事件を防ぐにはなにが必要だったのだろう	
展 開	なぜこの事件が起こってしまったのか、グループ（周りの人）と考えてシートに書く。 発表する。	机間指導
	授業の感想を学習シートに書く。 感想を発表する。	机間指導 「次の時間では、周りに何ができるか考えていきたいと思います。」 2000 年虐待の新聞記事を見せる。 「13 年前から変わらない。何が必要か」

資料 1 本時の指導過程



資料 2 新聞記事

2013 年 7 月 2 日 中日新聞

4.5 模擬授業④ 観察者：杉本のナラティブ

授業中、伊深は終始落ち着いた様子で、一度も笑顔を見せなかった。伊深がこの新聞記事の事件を深刻に捉えていることが伝わってきた。新聞記事を「教材」として扱っているのではなく、「一つの事件」として扱っている感じがした。今回はじめて、新聞記事を読んだ後、事実と気持ちを書き出す作業を取り入れた。事実として被害者の名前を板書する際、伊深が小さな声で「杏奈って可愛い名前だね」と言ったのが印象的だった。そのつぶやきを聞いて「確かに。名前からは愛情が感じられるのに、どうしてネグレクトをしてしまったのだろう・・・。」と思った。気持ちを考える場面では、生徒の様子を見て「気持ち」を「気持ち・気づいたこと・疑問」と書き直していた。こうすることによって、生徒が発言しやすくなった。指導案にこだわらず、その時、その場の生徒と授業を進めていく授業だと思った。展開の「なぜこの事件が起こってしまったのか」では伊深が「母 気づいてほしかった」「甘い」という言葉を板書し、それに対立させるような意見を求めている。そこから生徒は虐待の原因を客観的な目で考えることができ、社会にも目を向けることができていた。

今回の授業は、課題となっていた主観・客観のどちらからも児童虐待を捉えることができるものだったと思う。授業の最後に 2000 年の新聞記事を見せることで、生徒の思考をさらに深めることができたと思う。また、2000 年の新聞記事については、13 年経っても変わらない現実を伝えると共に「この事件こそ、親として未熟だった場合だね」と言ったことで、2013 年の新聞記事は親の未熟さだけが原因ではないことが強調されているように感じた。

この授業を通して、何よりも印象的だったのが授業者の立居振舞だ。語りかけるような落ち着いた口調で、授業者が生徒と一緒に考えを深めていこうとしているように感じた。そのため、「教師の考えの押しつけ」が感じられなかった。授業全体の流れがスムーズになり、生徒に一番考えさせたいところで十分に考えさせることができていたように思えた。まだまだ「これで虐待の授業が完成した」とは言えないけど、少しだけ杉本のやりたかった授業に近づいた気がした。

しかし、模擬授業④のカンファレンスでは、赤ちゃんの泣き声を学生に聞かせる際の場面設定のしかたや、授業中盤の展開部分「この事件を防ぐにはどうすれば良かったの？」の発問に対し、授業者が「甘い」と言い切ってしまったことで、自分の意見が言えなくなってしまった学生がいたことが課題として議論された。また、この授業も社会批判で終わってしまったことが大きな課題である。授業では「社会がどうすれば良かったのか」が主な話し合いであったため、結果として、児童虐待の問題を社会に投げて終わってしまった。学習目標である児童虐待を「身近」に感じることができたのかは疑問が残る。この授業の目的は、授業者の考えを押しつけることではなく、生徒に現実を知ってもらうこと、児童虐待について考えることであった。

5. 終わりに

児童虐待の授業を自分の身に引き寄せてとらえることを目標にした本研究の結果は、以下の 4 点である。

1点目は、「情報の整理をする」ことである。模擬授業①②③では各自で新聞記事を読んで児童虐待の原因について考えた。模擬授業④では各自で新聞記事を読んだあと、新聞記事から事実と気持ちを書き出す作業を取り入れた。事実を書き出すことで、情報が整理され、その事実から母親は幼少期に虐待されていたこと、また夫からも暴力を受けていたことなど虐待の背景にある問題点を明確にすることができた。新聞記事を個人で読んで感想を発表するだけでなく、全体で新聞記事をていねいに読み込むことで新聞記事の事実を明確にすることができる。

2点目は、「さまざまな立場から児童虐待を見る」ことである。模擬授業では赤ちゃんの泣き声を聞かせることで、虐待をしてしまう親の立場の視点をもつことができた。また、「どうすればこの事件は防ぐことができたのか」という発問により、社会で助け合う子育てとについて考えることができた。さらに、児童虐待授業後のアンケートでは「様々な教科で児童虐待について考えることでいろんな視点から捉えることができる」という意見が多くみられた。家庭科の授業でさまざまな立場から児童虐待を考えるだけでなく、道徳、社会科、総合的な学習の時間など教科の枠を越えて児童虐待を考えることが示された。さまざまな視点から児童虐待が起きる原因について理解を深めることで、虐待の予防にも繋げることができる。

3点目は、「授業者の表情や言葉遣いが大きく影響を与える」ことである。模擬授業④では授業者の落ち着いた口調と表情から児童虐待の深刻さを感じ取ることができた。授業者の作り出す雰囲気によって生徒の受け止め方が大きく違うということがあきらかになった。

4点目は、「その日、その時の授業をする」である。筆者は模擬授業③の際、指導案通りに授業を進めることで精一杯になっていた。そのため唐突な発問が目立ち、沈黙の授業となってしまう。学生の発言をただ板書するだけで、授業の内容を深めることはできない。模擬授業④では、学生の様子に合わせて発言項目を増やしている。発問の仕方も話しかけるような口調で、学生との会話の回数が多い。会話のキャッチボールによって段々深まっていく授業であった。指導案にとらわれずに、その日その時の教室の中の状態に合わせて授業を変えていくことが、虐待の授業では重要である。

今後の課題は、生徒を傷つけない授業づくりである。虐待を経験している人も、そうでない人も、虐待の授業を受けることで、自分の過去と向き合い、過去を乗り越えられるような授業づくりをめざす。また、学校現場で使いやすい授業方法が授業の流れを止めないために考慮されなくてはならない。本研究で提案した授業では、パソコン・スピーカー・プロジェクターを使用した。模擬授業③では、赤ちゃんの泣き声を流す時に、機器の操作に手間取り、授業の流れが止まってしまう場面があった。学校現場で取り入れやすい授業方法を考えることが必要である。

家庭科の授業で児童虐待の内容を扱うべきかどうかは、授業を受ける生徒の実態や様子に合わせて判断することである。どんなに考えて作った授業でも、生徒を傷つけてしまう結果になる可能性がある。児童虐待の授業をすることで、生徒を傷つけることは許されないことである。授業後のアンケートに、家庭科で虐待の授業を行うべきという意見の中に「きっといい授業になる」

「授業をやってほしい」「その授業によって救われる子もいるかもしれない」という記述があった。虐待という現状から目を背けることなく、勇気をもって児童虐待の授業づくりを続けていかなければならない。

片田江（2010）は、家庭科教員の家族教育体験は3つのエッセンスから成ることを明らかにしている。『とりあえずお知らせみたいな感じで教える』『私だって私の人生しか知らないからと思いつながら教える』『気を遣いすぎて・ちょっと怖いと思いつながら教える』の3つである。片田江は、3つのエッセンスからは、家族をとりまく状況が複雑になる中で、生徒を傷つけないように気を遣ったり、内容をにごしたりする教員の姿が浮かび上がった。プライバシー不安ともいえる教員の不安感を表していると述べている。本研究の児童虐待の模擬授業③では、片田江が示したエッセンスの一つである『気を遣いすぎて・ちょっと怖い』を実感することになった。気を遣ってはいたのだが、人を傷つける授業になってしまったからである。しかし、模擬授業④では、児童虐待の事実をていねいにみていき、その事実について授業の中で考える場をもったことで、本研究が目指した、児童虐待を自分の身に引き寄せて考えることに近づくことが出来た。傷つけない授業を目指さなくてはならないが、傷つけることを恐れて、『お知らせみたいに、気を遣いすぎて、ちょっと怖い』と思いつ授業をしていては、児童虐待がなくなる日は来ない。

引用文献

天野稔子・山田綾.(1999).現代生活を探求する授業.—「子ども虐待」・「早期教育」から現代家族を考える—.愛知教育大学教育実践総合センター紀要,2

石川勝江. (2013). 評価が変わると授業が変わる—子どもとつくる家庭科—.開隆堂,pp84-87.

片田江綾子.(2010).家族について教えるということ—家庭科教員の家族教育体験に関する現象学的研究—.日本家庭科教育学会誌,53

厚生省 子ども虐待対応の手引き 平成12年11月改訂版

千葉県高等学校教育研究会家庭部会 家庭科教育推進委員会.(2013).あんころ〜家庭科の授業案がころころ出てくる本〜.教育図書

鶴田敦子.(2004).家庭科が狙われている—検定不合格の裏に—.朝日新聞社,pp189-190.

参考資料

豊橋4歳児放棄事件.(2013.7.2).中日新聞社

赤ちゃんの泣き声.<http://www.youtube.com/watch?v=jBLdtGXkOnQ>

バスの動画.Dailymotion